

山帰り (山帰強桔梗)

へ伊勢の御が 玉なしの里ならずして 魂棚かざるわが宿の 後は
野となれ山参り へ何のその男は裸百貫の かけ念仏も向う見ず
夜山で盆をすつぱりと 切払つたる納太刀 諸願定宿子安までおり
て 五六の蚊帳の内 へ四六のあまに劣つたる どぶつに二朱文あり
がたい へよい福の神江ノ島に 喰合ひないとこ唐人と よこにかすつ
て神奈川の へ便りの文にくらがへを たづねて奇特な篋棒は 我
が身ながらも羽根澤屋 のろいかひなのほりものへ まだ引導を渡さ
ずに あつたところから物云ひを 厭味な奴さどうだろ へ四谷では
じめて逢うたとき 好いたらしいと思つたが 因果な縁の糸車 めぐ
りめぐつて大山も 石尊さんの引合せ へ思えばほんに南無奇妙頂
禮な うまい仲ではないかいな 色にや命もやり放し 大和人形大
和屋が 庄内節でやつてくりよ へ親が叱ろが撰関しよがの 儘よノ
ウこれ 惚れた殿さが捨てらりようか いささかさつと出す舟は へ
舟は稻荷丸船頭衆は 狐ヤットコセ汗かいて へしよんなぐれ 若いと
きや二度ない その気でなければ 生もな食われぬ へしよんなぐれ
おつとろしいではあるまいか へあす朝顔のかけながし ところが江戸
つ子紫と 勇みは水によるならん 勇みは水によるならん